The English Society of Japan

研究ノート（Notes and Discussion）

Onomasiological な観点からの前置詞 For の意味論*

花 﨑 美 紀・花 﨑 一 夫

1. はじめに

前置詞の多義研究は、1語の多義を扱う semasiological な研究（例：fruit は果実・結果・・・という意味があるとする研究）が中心となっている傾向があるが、本研究では、それに近似義語を扱う onomasiological な視点（例：果実を表す語には fruit・nut・・・・があるとする視点）を加え、その近似義語間に見られる意味の重なりの緊張関係が意味拡張を阻止すると考える。先行研究には、2語以上を扱う研究もあるが、それらの違いを述べるにとどまり、その違いが意味拡張を制限するといったような「動的」な研究はまだない。我々は以前、前置詞の多義を従来の意味論でしばしば行われるようにsemasiologicalな視点で研究してきた。しかし、その一連の研究で、従来のメタファー・メトニミーによって意味拡張を説明しようとする理論は、(1) 意味が際限なく広がることを阻止することはできず、(2) 新しい意味の予測が不可能であることがわかった。そこで、意味拡張は、複数の可能性が緊張関係の中に存在した後、それぞれの語の弁別的意味要素により取捨選択されることを通して行われるという見解、つまり、pragmatic strengthening を中心とした行為理論によって意味「用法」の拡張の可能性を探り、さらに、onomasiological な視点にたち、近似義語の中心義が意味拡張を制限するという立場をとれば、上述の問題は解決されることに気がついた。さらに、その緊張関係の中で、意味拡張の可能性を阻止されたものは、慣用表現としてのみ存在しうるということがわかり、この考えのもとに前置詞の棲み分け研究を行い、一定の成果をあげてきた。 慣用表現とは、2語以上の語が集まって使われる表現（例：but for, by day）であるが、従来の多義研究では、それらは、メタファーやメトニミーによる意味拡張によってできたと説明されてきた。ところがその説明だけでは、意味拡張を制限出来ないだけでなく、どうして中核から大きくはずれた意味は、2語以上の語が集まった慣用表現の形でしか残ることができなかったかが説明出来ない。本研究は、慣用句は、onomasiologically に共存していた複数の語の内（例：「～の間」by, during）、他の語にブロックされたものは、別の語との組み合わせの中でのみ存在しうる（別の語の助けを借りてのみ存在しうる。例：「～の間」なら、during によってブロックされた by は、day という別の語の助けを借りて by day という慣用句としてのみ生き残れた）ものであるという見解をもつ。本研究ノートでは、前置詞 for の意味を、上述した観点から考察するものとする。

* 本稿は、花﨑美紀・花﨑一夫（2012）を発展させた研究である。

2. For の意味の同定

このセクションでは、花﨑・花﨑（2012）を援用して for の意味の同定を行う。紙面の都合で詳述することはできないが、Tyler and Evans (2003) 流のやり方を採用して for の意味を以下のように分類することとする。

(1) For の意味の分類

・I 類［TR から LM への方向性が感じられる］

a. 方向 〈in the direction of〉
leave London for India

c. 追求 〈in pursuit of〉
look for a job

g. 利益 〈for the benefit of〉
sing for each other

h. 賛成 〈in support of〉

NII-Electronic Library Service

The English Society of Japan

I am for it

l. 記念して 〈in celebrating〉
name a child for the king
for the health

n. ～に対して 〈as "object"〉
responsible for

・II 類［LM から TR への方向性が感じられる］

b. 目的 〈for the purpose of〉
He arrived for dinner

e. 代用・代表 〈in place of〉
used the ashtray for a paperweight
Mary spoke for her class
send a check for $500

f. 理由 〈because of〉
he shouted for joy

・III 類［TR と LM の間に双方向性が感じられる］

d. 交換 〈in exchange with〉
I paid \500 for this book

i. 1 対 1 〈by, at〉
three for one
word for word
appointment for this afternoon

j. ～として 〈as〉
mistake someone for somebody
blame the print for old

m. ～にしては 〈considering〉
the weather is severe for this season

・IV 類［TR と LM の間に方向性が感じられない］

o. 逆接 〈for all〉
for all I know

p. 否定条件 〈if there is no ～〉
but for your help

・その他

k. ～の間 〈throughout〉
～ is so for months

各類を図示すると、以下のようになるであろう。

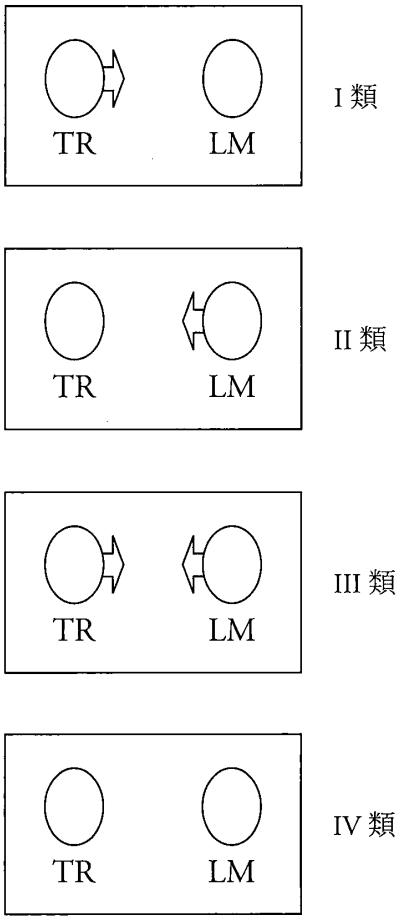

図 1 I ～ IV 類のイメージスキーマ

そして、本稿では、III 類の、互いに向かっている方向性をもつものが、for の中心義であると主張するが、紙面の都合上、次節以降、一見すると TR から LM への方向性しか感じられない I 類と方向性が感じられない IV 類を取り上げ、実際には I 類も IV 類も、III 類すなわち for の中心義と同じスキーマを持つと捉え直すことが可能であることを示し、さらにはなぜ but for のような慣用方法が生まれたのかについても考察する。

3. I 類 TR から LM への方向性が感じられるもの：To との比較

I 類は、TR から LM への方向性が感じられる用法であるが、TR から LM への一方向性を持つ前置詞としては to があげられる。よって、この節では、to と比較することにより、TR から LM への方向性をもつ for の意味について考察する。

(1) の I 類の中で、実際に to と交換可能かどうかを見てみることにする。

NII-Electronic Library Service

The English Society of Japan

(2) a. leave London for India
a'. *leave to India/ go to India
g. sing for each other
g'. sing to each other

上例からもわかるように、TR から LM への方向性が感じられる用法すべてにおいて to と交換可能とは言えない。to にも for にも TR からの働きかけがあるが、両者には違いがある。(2a') からわかるように、to は到達完了が含意されない leave などの「出発」を表す動詞と共起することができない。一方で、到達完了が含意される動詞 go とは共起できる。また、それぞれの to の例文と forの例文を比べると、forの方はtoの場合と違って、LM からの働きかけがあるということが可能である。(2g') は相手が聞いていようと聞いていまいと相手に向かって歌っている状態を表すが、(2g) においては、相手を喜ばそうとしている場合など、相手の要望に応じて歌っていると言うことができる。これは別の言い方をすれば、LM からの働きかけがあると言うことになる。つまり、to に比べると for の方が LM からの方向性が感じられるわけである。また、(2a') は leave の場合には to と共起できないが、go の場合には、to と共に用いると、目的地に向かっていくという意味になり、方向性は TR から LM 方向のみ感じられる。一方、(2a) は、インドに特別に興味をひくものがあり、そのために目的地に向かうという意味が強くなる。LM が無生物である場所であるからわかりにくいが、これを、him にすると、明らかに「彼」のために行くというニュアンスが加わるのがわかる。ここまで I 類を、to と比較し、for の場合も TR から LM への動きを持つことがわかったが、この TR から LM への動きは、LM からの働きかけに呼応する動きであるということが可能である。つまり、一見すると一方的な方向性をもつ I 類は、双方向的な方向性をもつものの中で、とりわけ TR からの動きが注目されているものと言うことができる。

To ともう少し比較するために、次に与格交代構文を見てみる。(3) のような与格交替構文で、to が用いられる場合と for が用いられる場合とでは、意味に大きな違いがあることが知られている (Kuno and Takami (2004) やそこでの参照文献を参照)。

(3) a. John gave Mary some money.
b. John gave some money to Mary.
c. John gave some money to John for Mary.

上例から分かるように、to の場合には、直接目的語が to の目的語に到達することがほぼ含意される。一方、for の場合には、(3c) の例にあるように到着する場所を明示しても for が使えることから、for の目的語に到達することまでは含意されないだけでなく、その行為は、for の後に来る人の利益になるようにという意味がある。

もう一つ例を出しておくなら、for は死者など到達することのない対象についても使うことができるのに対して、toは使えないということからも、for は、二重目的語構文・to 与格構文・for 与格構文のなかでは、最も到達を含意しないということがわかる。

(4) a. *Would you like to sing a song to late Mary?
b. Would you like to sing a song for late Mary?
(森山他 2010:54)

まとめると、I 類の for は、to と同様に TR から LM への方向性を持つものの、for は到達を含意せず、むしろ、LM からの働きかけに応じて LM へ向かうという<双方向性>を表していると捉えた方がよいということが、to との比較から明らかになった。ここに to との棲み分けができていることが示されたことになり、for の I 類の意味を図示すると以下のようになる。

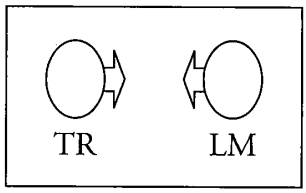

図 2 For の中心義スキーマ

4. IV類 TR と LM の間に動きが感じられないもの

紙面の都合上、IV 類を代表する for all + that 節の具体例である For all that she was a heavy woman, she danced well. ("all" in Genius) で説明すると、上例文でもわかるとおり、主節の内容と for all + that 節の内容が反目しながら対峙していると捉えられる。つまり、同じ空間に 2 つを並べて 2 つがばらばらな方向を向いているというわけではなく、積極的にお互いに向き合って対峙しており、そこに図 2 のような双方向性が読み取れるわけで

NII-Electronic Library Service

The English Society of Japan

ある。その意味では、IV類の用法も図2のスキーマで説明が可能であると言える。ではなぜこのような慣用用法が生まれたのかを簡単に考察したい。図1のIV類のイメージスキーマは、現代英語におけるwithと同じである。ただ、古英語期にはwithには「一緒に」の意味はなく（cf. OED with 22a)、「一緒に」の意味をmidで表していた。また、for all, but forのいずれも、ただの付帯状況ではなく譲歩的・否定的な付帯状況の意味を持つが、midにはwithに対するwithoutのような否定形がなかったことからもわかるとおり、否定的な意味と結びつくことはなかった。よって古英語期にはforとの棲み分けが起こったと考えられると同時に、同じイメージスキーマをもつmidのためにIV類の拡張が阻止されたと考えられる。中英語以降になるとmidが消失し、その役割はwithに引き継がれるようになったわけだが、そうなった段階では、forと同じイメージスキーマをもつwithがIV類の拡張の阻止要因となり、結果として慣用用法としてbut forなどの表現が孤立用法として残ったと考えられる。

5. まとめ

本稿では、前置詞forの分析のなかでonomasiologicalな視点を取り入れて前置詞の比較分析をすることでその棲み分けを説明すると同時に、慣用表現を分析することによって、どうして前置詞の用法が際限なく拡張していくことが阻止されるのかについて妥当な説明を与えることができた。今後もこのような観点から前置詞研究をしていけば、一見すると機能語であると思われがちな前置詞の「意味」の包括的な分析が可能になるであろう。

参考文献

花﨑美紀・花﨑一夫 . 2012.「Forの意味論再考」.『人文科学論集〈文化コミュニケーション学科編〉』46, 85-108.

Kuno, Susumu and Ken-ichi Takami. 2004. *Functional Constraints in Grammar on the Unergative-Unaccusative Distinction*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

森山智浩 他 . 2010.『英語前置詞の概念ー認知言語学・教育学・社会学・心理学・言語文化学の学際的観点からー』. 名古屋：ブイツーソリューション .

Tyler, Andrea and Vyvyan Evans. 2003. *The Semantics of English Prepositions: Spatial Scenes, Embodied Meaning and Cognition*. Cambridge: Cambridge U. P.

辞書

- "all" in ジーニアス英和辞典 . 大修館 .
- "with" in OED.

NII-Electronic Library Service